

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際栄養科学連合
	英	International Union of Nutritional Sciences (略称 IUNS)
	団体 HP (URL)	http://www.iuns.org (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 無)
国際学術団体における最近のトピック (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>世界では、人口増大等による栄養欠乏と過剰な栄養摂取を背景とした疾患という、相反する 2 つの栄養問題の拡大が大きな課題となっている。さらにこれらが同一のコミュニティーに共存する「二重負荷」が各国家の負担となっている。IUNS は様々なタスクフォースや提言等を通じて各国におけるこれらの問題の解決・改善に寄与してきた。近年は、WHO や FAO との連携が進んでおり、栄養関連政策の形成に科学的根拠を提供し、食糧・栄養問題や政策提言において大きな影響力をもっている。特に「SDGs (持続可能な開発目標) と栄養の関係性」について国際的な発信を継続している。</p> <p>IUNS における学術的な進歩・潮流として、栄養学の研究対象を「欠乏・過剰の問題」から、生活習慣病・精神健康・地球環境にまで関わる学際的分野へと拡張している点が挙げられる。さらに、「栄養の個別化 (パーソナライズド・ニュートリション)」「食と腸内細菌叢」「フードシステムの持続可能性」といったテーマが、近年の主要な議題となっている。IUNS の運営においては、「グローバルサウス (発展途上地域) からの研究者参加」を重視する姿勢が強調され、若手研究者や低中所得国の研究者支援 (例: トラベルグラント、参加費補助) を積極的に推進している。</p>	
当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例	<p>IUNS は、栄養に関する最新の科学知見を国際社会に展開し、各国の政策や実践に反映させるという形で学術の進歩に寄与している。単なる研究成果の発表にとどまらず、学術・政策・実践をつなぐグローバルなハブとしての役割を果たしている点にこの団体の価値がある。IUNS が学術の進歩に貢献した事例として以下のものが挙げられる。</p> <p>ヒトの栄養素摂取基準策定の推進: 各国で異なっていた栄養素の摂取基準を、科学的根拠に基づいて整合化しようという動きを受け、FAO・WHO と協働し、国際的に通用する栄養素要件の科学的根拠を構築し、世界各国のガイドライン策定に大きな影響を与えた。</p> <p>栄養と非感染性疾患 (NCDs) との関連研究の推進: がん、心疾患、糖尿病などの NCDs が世界的な課題になっていることを受け、栄養と NCDs の因果関係や予防的介入に関する研究成果を集約・発信し、WHO・各国政府との連携により、「食環境の改善」や「砂糖・塩分の制限」などの政策立案を支援した。</p> <p>乳幼児および母子栄養の改善研究の国際協働: 発展途上国での乳幼児の成長障害や母体栄養が課題となっていることを受け、ユニセフ・FAO と協力し、母子の栄養介入研究を行い、エビデンスに基づいた栄養プログラムを設計した。</p> <p>フードシステムと持続可能な栄養の統合研究: 地球環境・気候変動と人</p>	

	<p>の健康の両立が課題になっていることを受け、持続可能な食と栄養（sustainable nutrition）」の分野で、食料生産・消費・廃棄までを含めた学術的議論をリードし、SDGs 目標 2「飢餓をゼロに」達成に向けた栄養研究の整理と政策提言を行った。</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等</p>	<p>「Sustainable Diets」、「Precision Nutrition」などの活動が今後の政策提言や世界潮流となりそうである。「Sustainable Diets」では、農業、環境、健康の観点から、人間の健康だけでなく、地球の環境の保全も視野に入れた持続可能な食についての検討が行われている。WHO の SDGs（持続可能な開発目標）には栄養が強く関連する目標が多く含まれており、健全な食生活のための持続可能な食料システム、母親や乳幼児への適切な栄養供給は、特に重要なテーマと位置づけられている。「Precision Nutrition」は、遺伝子や腸内細菌叢、生活履歴を組み合わせて、個人に最適化された栄養指導や食品設計を行うもので、デジタルヘルスやウェアラブル技術との融合が期待される。医療・保健政策と連携し、予防医療や生活習慣病管理に活用可能な研究テーマである。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例</p>	<p>4年に一度開催される IUNS の全体会議である国際栄養学会議（International Congress of Nutrition, ICN）の第 10 回大会は、1975 年に当時の日本学術会議会長の越智勇一氏を大会長として、京都で開催された。さらに、第 22 回大会の日本への誘致を IUNS 分科会と複数の関連学会とで進め、2013 年の総会で東京での開催が決定した。IUNS 分科会を中心に開催準備を進め、2022 年に加藤久典 特任連携会員（元 IUNS 分科会委員長）を組織委員長として第 22 回大会（IUNS-ICN2022TOKYO）を開催した。この大会は当初 2021 年の開催予定であったが、世界的な COVID-19 の感染拡大により開催が危ぶまれる事態となった。加藤実行委員長の英断で 2022 年の対面開催を決定し、多くの制約がある中で海外からの参加者を集めて成功裡に大会を開催した。IUNS-ICN2022TOKYO の開催にあたっては、当時 IUNS 理事であった宮澤陽夫 前特任連携会員が IUNS との調整に当たった。</p>
<p>当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化</p>	<p>日本学術会議を窓口として日本が IUNS に加入していることにより、学術会議としては、国際学術ネットワークを通して情報共有・共同研究・政策提言の場に参画できること、タスクフォースや ICN（国際栄養学会議）での発言権や日本からの研究者派遣を通して科学的貢献を可視化できること、日本の食事摂取基準・学校給食・健康政策に関する科学的根拠に基づいた知見を国際場面で発信可能になることが挙げられる。関連学会においては、若手研究者の国際ネットワーク形成・研究発表・共同研究の機会となること、栄養と気候変動・ジェンダー・SDGs などの国際的トピックスと研究を接続できること、IUNS で共有される知見を通じて日本国内の研究や実務を国際標準に近づけられることが挙げられる。日本国民にとっては、栄養政策推進における世界基準の科学的知見が日本の保健・栄養政策にフィードバックされること、日本初の栄養文化である和食が科学的に評価され、国際的な健康モデルとして評価されること、国際的な栄養危機に対して日本が人道的・技術的支援を行える基盤づくりになる可能性が挙げられる。</p>

<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>2015年より、発展途上国で博士を取得した若手の研究者向けの Re-Integration Grant の制度を開始している。各国で栄養学の若手研究者のリーダーシップ育成ワークショップを開催してきたが、日本でも2010年、2014年、2017年、2021年にこれを開催し、主にアジア圏の若手研究者の研鑽の場として有効に機能している。</p> <p>また、日本栄養・食糧学会と共催で当該分野の日本・韓国・台湾の若手研究者による国際シンポジウムを毎年5月に開催し、若手研究者の交流と活躍を支援している。2025年は「アジア若手研究者が切り拓く食品・栄養研究の最前線」(Frontiers of Food and Nutrition Research Pioneered by Young Asian Researchers) というタイトルで各国2名の若手研究者の講演を行い、将来有望な若手研究者が国際学会での発表経験を積む機会を提供することも目的としている。</p>
--	--

2 今後の予定について（内規第11条 活動報告）

<p>総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）</p>	<p>なし</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定</p>	<p>IUNS Living Legend Award に1名、The Fellows of IUNS (FIUNS) に2名を推薦している。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き</p>	<p>2025年8月にフランス・パリで開催予定の国際栄養学会議において IUNS 分科会の後援シンポジウム”Cutting-edge nutritional research by promising young Japanese researchers”を行う。このシンポジウムでは日本の若手研究者4名が講演を行う。</p> <p>Dr. Nevin S. Scrimshaw Prize に5名の候補者（2025年8月にフランス・パリで開催予定の国際栄養学会議で授与）を推薦している。</p>

3 国際学術団体会議開催状況（内規第11条 活動報告）

<p>総会・理事会・各種委員会等の状況（過去5年間及び今後予定されているもの）</p>	<p>総会開催状況</p>	<p>2017年（開催地：アルゼンチン） 2022年（開催地：日本） 2025年（開催地：フランス）予定</p>
	<p>理事会・役員会等開催状況</p>	<p>理事会 2017年（開催地：アルゼンチン） 理事会 2018年（開催地：ナイジェリア） 理事会 2019年（開催地：英国） 理事会 2020年（開催地：英国） 理事会 2022年（開催地：日本） 理事会 2025年（開催地：フランス）予定</p>
	<p>各種委員会開催状況</p>	<p>理事会：2024年2月29日～3月1日（開催地：ロンドン）IUNSの戦略的報告性や今後の活動計画についての議論が行われた。</p> <p>タスクフォース委員会：2022年10月～2023年12月に5回の主要会議を開催。また、各タスクフォースはメール会議および電話会議を頻繁に行い、活動を推進している。新規タスクフォースが2024年10月～2025年3月に募集され、これにより2025年～2029年に活動する新たなタスクフォースが設立される。各タスクフォースの近年の活動報告は、以下で公表されている。</p> <p>http://www.iuns.org/task-forces/</p>

	研究集会・会議等開催状況	<p>第 21 回 ICN 2017 年（開催地：アルゼンチン） 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ 2017 年（開催地：日本） 公開シンポジウム「コロナ下において考えるべき栄養」 2021 年（開催地：日本） 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ 2021 年（開催地：日本） 第 22 回 ICN 2022 年（開催地：日本） 公開シンポジウム「日本栄養・食糧学会 (JSNFS) 韓国食品栄養科学会 (KFN) ジョイントシンポジウム」 2022 年（開催地：日本） 公開シンポジウム「食糧科学と機能性に関する日本栄養・食糧学会、韓国食品栄養科学会、日本学術会議合同国際シンポジウム食品科学・機能・加工の潮流」 2024 年（開催地：日本） 公開シンポジウム「アジア若手研究者が切り拓く食品・栄養研究の最前線」 2025 年（開催地：日本） シンポジウム” Cutting-edge nutritional research by promising young Japanese researchers”を第 23 回 ICN 2025 年（開催地：フランス）で開催予定</p>																																
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定		<p>2013 年 第 20 回 IUNS-ICN（スペイン），日本人参加者 200 名 （うち代表派遣：宮澤陽夫 IUNS 分科会元連携会員） 2013 年 IUNS 総会（スペイン），5 名（清水誠 IUNS 分科会元委員長，加藤久典 IUNS 分科会元委員長，熊谷日登美 IUNS 分科会前委員長ら） 2014 年 IUNS 理事会（オランダ），1 人（理事：宮澤陽夫） 2015 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2016 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2017 年 第 21 回 IUNS-ICN（アルゼンチン），日本人参加者 150 人 （うち代表派遣：加藤久典 IUNS 分科会元委員長） 2017 年 IUNS 総会（アルゼンチン），8 人（宮澤陽夫 元連携会員，清水誠 IUNS 分科会元委員長，加藤久典 IUNS 分科会元委員長，熊谷日登美 IUNS 分科会前委員長ら） 2017 年 IUNS 理事会（アルゼンチン），1 人（理事：宮澤陽夫） 2019 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2020 年 IUNS 理事会（英国，1 人（加藤久典） 2022 年 第 22 回 IUNS-ICN（日本），1571 名（日本人参加者数）</p>																																
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去 5 年）		<table border="1"> <thead> <tr> <th>役職名</th> <th>役職就任期間</th> <th>氏名</th> <th>会員、連携会員の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>理事</td> <td>2013～2021</td> <td>宮澤陽夫</td> <td>(22～24 期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td>Fellow</td> <td>2017～2021</td> <td>清水誠</td> <td>(19,22,23 期) <u>会員</u>・連携</td> </tr> <tr> <td>選挙管理委員</td> <td>2013～2017</td> <td>加藤久典</td> <td>(23,24 期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td>Living Legend</td> <td>2017～2021</td> <td>小林修平</td> <td>() 期) 会員・連携</td> </tr> <tr> <td></td> <td>～</td> <td></td> <td>() 期) 会員・連携</td> </tr> <tr> <td></td> <td>～</td> <td></td> <td>() 期) 会員・連携</td> </tr> <tr> <td></td> <td>～</td> <td></td> <td>() 期) 会員・連携</td> </tr> </tbody> </table>	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別	理事	2013～2021	宮澤陽夫	(22～24 期) 会員・ <u>連携</u>	Fellow	2017～2021	清水誠	(19,22,23 期) <u>会員</u> ・連携	選挙管理委員	2013～2017	加藤久典	(23,24 期) 会員・ <u>連携</u>	Living Legend	2017～2021	小林修平	() 期) 会員・連携		～		() 期) 会員・連携		～		() 期) 会員・連携		～		() 期) 会員・連携
役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別																															
理事	2013～2021	宮澤陽夫	(22～24 期) 会員・ <u>連携</u>																															
Fellow	2017～2021	清水誠	(19,22,23 期) <u>会員</u> ・連携																															
選挙管理委員	2013～2017	加藤久典	(23,24 期) 会員・ <u>連携</u>																															
Living Legend	2017～2021	小林修平	() 期) 会員・連携																															
	～		() 期) 会員・連携																															
	～		() 期) 会員・連携																															
	～		() 期) 会員・連携																															
出版物	<p>1 <u>定期的</u> (年 6 回) 主な出版物名 Annals of Nutrition and Metabolism 2 不定期 () 主な出版物名</p>																																	
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (http://www.iuns.org/news/)</p>																																		

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

	委員会名	IUNS 分科会
	委員長名	竹中 麻子
国内委員会 (内規4条第3号)	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>第1回 2024年2月22日 10:00~11:50 委員長等の選任、第25期の活動報告、第26期の活動計画について審議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2024年3月15日に日本国際食品科学工学連合・公益社団法人日本栄養・食糧学会との共催で公開シンポジウム「IU FoST-Japan, SCJ, and JSNFS Joint Webinar on Food Nutrition and Functionality」を zoom ウェビナーでオンライン開催した。 ・2024年5月25日に、公益社団法人日本栄養・食糧学会 (JSNFS)、韓国食品栄養科学会 (KFN) との共催で国際シンポジウム「JSNFS, KFN and SCJ Joint Symposium on Trends in Food Science, Function and Processing」をハイブリッドで開催した。 ・ IUNS Living Legend Award、The Fellows of IUNS(FIUNS)、Dr. Nevin S. Scrimshaw Prize の各賞候補者 (2025年8月にフランス・パリで開催予定の国際栄養学会議で授与) を国際栄養科学連合 (IUNS) に推薦した。 ・2025年8月にフランス・パリで開催予定の国際栄養学会議において、公益社団法人日本栄養・食糧学会 (JSNFS) 主催のシンポジウムを後援予定である。
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.iuns.org/about-iuns/policy/)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.iuns.org/about-iuns/policy/)</p>	
	<p>下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ア 個々の学術の専門分野における統一のかつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一のかつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	

	<p>10 ヲ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>1. 該当する 2. 該当しない</p>
	<p>(83 ヲ国)</p> <p>・ 各国代表会員名／国名</p> <p>American Society for Nutrition／米国</p> <p>The Australian Academy of Science／オーストラリア</p> <p>The Nutrition Society／英国</p> <p>Indian National Science Academy／インド</p> <p>Union Francaise pour la Nutrition et l'Alimentation／仏国</p> <p>German Nutrition Society／ドイツ</p> <p>Italian Nutrition Society／イタリア</p> <p>National Research Council Canada／カナダ</p> <p>Chinese Nutrition Society／中国</p> <p>Institute of Nutrition of the Russian Academy of Medical Sciences／ロシア</p>

(参考)

国内関係学協会（主要 2 団体）

公益社団法人日本栄養・食糧学会、特定非営利活動法人日本栄養改善学会